

## 前田流平曲の史的変遷：国語史資料としての観点から

奥村，和子  
純真女子短期大学講師

<https://doi.org/10.15017/11908>

---

出版情報：語文研究. 71, pp.18-31, 1991-06-02. 九州大学国語国文学会  
バージョン：  
権利関係：

# 前田流平曲の史的変遷

——国語史資料としての観点から——

奥村和子

平曲の史的研究が、言語史を始め、文学史（平家物語の展開や受容）、邦楽史など、いろいろな文化史研究に貢献するということは、すでに説かれたところである。この場合、平曲研究の資料としては、現行の前田流平曲もあるわけだが、本稿では、史的変遷という意味もあり、譜本類を中心に考えることとする。もちろん、館山甲午氏の平曲等に基づいて、平家正節の節ハカセを解釈するというような方法（一九九〇年七月の平家琵琶研究会における金田一春彦氏の御発表等）が重要であることは言うまでもなく、最終的には両方法の総合的研究を理想とすべきであろう。

ところで、本稿の趣旨は、もともと、平曲譜本に反映したアクセント等の史的考察であるが、そこではやはり、各譜本資料の性格検討が必要となる。従来は、いわゆる平曲譜本資料として、平家正節偏重の傾向もあり、ともすれば、そこに現れる現象が、平曲譜本の姿として捉えられる場合もあった。しかし、周知のように、譜本は多様であり、また、京都大学本平曲正節（いわゆる京都前田流本を底本とする部分のほか、江戸前田流本や平家吟譜などに基づく部分もある）のように、その内部で複雑な様相を呈する本も存在する。

当然、各譜本に関する詳細な性格検討が重要課題となってくるわけである。そのような観点から、本稿では、とりあえず前田流本を中心に諸譜本の比較考察を行い、その系統関係などの整理を試みたい。その事が結局、国語史資料（ここではアクセント史料）として見た平曲譜本の考察にも発展してくるはずである。なお、波多野流平曲譜本は、その古譜本と思われる『秦音曲鈔』等を除くとほぼ同文同譜である故、ここでは前田流を中心としたわけである。

いま、口説という曲節における譜記形式を中心に、いわゆる前田流平曲譜本を分類すると、大きく次の二つに分けられる。

①線条式ハカセ（「／・」等）のもの——貞享四年本・富倉徳次郎氏所蔵本・平曲吟譜・平志吟譜・昭和女子大学本・早稲田大学演劇博物館蔵本（以下『演博本』）・東京大学南葵文庫本（以下『南葵文庫本』）等。

②文字式ハカセ（「上・中」等）のもの——也有自筆本『平語』（以下『也有本』）・愛知県立大学本・平家正節（演博本の改訂部分・京都大学本平曲正節のB類などを除く）等。

この場合、仏教声明その他の邦楽関係譜本類等を考慮すれば、線条式ハカセの方が古いものと考えられる。

ところで、この分類に関連して、筑波大学蔵平曲譜本（旧東京教育大学本。以下、『筑波本』）や、東北大学所蔵本（以下、『東北本』）等が問題になってくる。

まず筑波本について言えば、渥美かをる氏は、これを、「未だ一方流が波多野・前田流に分岐しない前のもの」（『平家物語講座』第二巻四頁）と言われたが、口説におけるハカセが文字式である点、注目される。前田流の始祖・前田検校が、京都から江戸へ下った後に伝えたとされる、江戸前田流諸本（富倉本・演博本・南葵文庫本等）はすべて線条式ハカセであるから、也有本や平家正節等、いわゆる京都前田流系の譜本に用いられている文字式ハカセは、前田検校自身の考案というよりも、むしろその京都時代の高弟である山下検校（一六四四年権成）あたりの創始かと考えられる。とすれば、口説に文字式ハカセを用いる筑波本は、也有本や平家正節等と同様、京都前田流の流れにあることになり、あるいは、山下検校の頃まで時代を下げるべきかとも思われる。内部徴証の詳しい検討を試みても、例えば、筑波本と也有本とは、非常によく似た本といえる。左記は、両書の共通性の一部を示したものである。

①白声という曲節がないこと。これに対し、江戸前田流本や波多野流本には、原則として白声がたてられている。筑波本を含めて京都前田流では、白声の確立が遅れたものと考えられる。

②口説におけるハカセの種類・用法がほぼ同様であること。

(a)口説におけるハカセは「上」「中」の二種類である。（これに対して平家正節は、同じ文字式ではあっても、「中」がなく、「上」

というハカセが用いられる。）

(b)而して、これらの譜記を、そこに反映したアクセントという観点から検討してみた場合、「上」は原則としてアクセント高音部を表す。

(c)これに対し「中」は、「上中」「×中」「×」は無譜記」という使われ方の場合、原則としてアクセント高音部を表し、「中上」の場合のみアクセント低音部を表すようである。すなわち、「中上」は●●、「×中」は○○、「中上」は○○●●を表していると考えられる。次はその具体例である。

「上中」——「口」（筑波本58頁）「誰」（同64頁）「顔」（同86頁）  
「×中」——「咎」（同15頁）「何」（同54頁）「今日」（同73頁）  
「中上」——「父」（同12頁）「母」（同78頁）「何」（同96頁）等。

(d)具体的な譜記の例を比較しても、両本は同じ箇所と同じ譜記の付いている場合が多い。例えば、二、九音節の低起式アクセントの語に関して、両本の比較を試みると、その一致率はおよそ80%になる。

\*筑波本の譜記は巻一のみであるし、一方、也有本は、平家正節式に改訂された部分が多いため、比較の難しい場合もあるが、比較し得る用例22例に関しては、17例までが一致する。左記はその例である。

「×中」——「何」（一・額打論、一・清水炎上）、「僧」（一・鶴川合戦）

「××中」——「いづれ」（一・清水炎上）、「出家」（一・禿）

「中上××」——「根本」（一・願立）

「中上×××」——「中納言」（一・鹿谷）等。

③筑波本と也有本の共通性については、渥美氏も、既に或程度言及されているわけだが、同氏が「口説を除いては全然異なったものである」(前掲書10頁)と主張されている点は、問題視される。即ち、その詳査を試みると、口説以外の曲節でも、次に挙げるように、譜記の一致する傾向が目立つのである。

「 $\diagup$ / $\diagdown$ 」—「僅かに」(一・我身栄花・下ゲ)、「てて×」—「知行」(一・我身栄花・三重)、「 $\diagdown$ / $\times$ てて×」—「年の若き」(一・妓王・中音)、「てて××」—「大将」(一・殿下乗合・初重)、「 $\diagdown$ / $\diagdown$ / $\diagdown$ 」—「尋めるに」(一・額打論・折声)等。

一方、東北本は、従来あまり取り扱われることのなかった譜本であるが、やはり文字式ハカセを用いており、しかも後述の如く、也有本以上に筑波本との相似性が著しい。筑波本ときわめて親しい関係にある京都前田流本と考えられる。

以上の如く、本稿では、渥美氏説と異なり、筑波本(及び東北本)を也有本や平家正節等と同様の京都前田流本と見なしたわけだが、その新古関係としては、筑波本が、也有本や平家正節よりもやや古いと言えそうである(もっとも、筑波本は也有本や平家正節と違って、奥書などの外部徴証が全く無い)。ここでは、筑波本、也有本、および平家正節という京都前田流譜本三本の相対的新古関係を考えるための一方法として、アクセントの問題を中心とした、譜記の比較を試みたい。左記は、その考察結果の一部である。

A 筑波本に「中上」表記が多い↓也有本で減る↓平家正節では「上上」が無い。

平家正節の「上」は「中」と異なり、アクセント低音部を反映する用法はないが、巨視的には一応、筑波本・也有本の「中」に相当すると考えられる。

前述したように、筑波本や也有本の「中」は、その前後関係により、アクセントの高音部を表す場合と低音部を表す場合がある。その複雑さを避ける為、「中」の例外的な低音表示形である「中上」表記が也有本で減少し、平家正節では姿を消したものと思われる。

〈例〉

筑「中上」↓也「 $\times$ 上」(父)——鶺鴒合戦、「母」——妓王

筑「中上 $\times$ 」↓也「 $\times$ 上 $\times$ 」(今度)——鶺鴒合戦)等。

B 筑波本に「上中上」が多い↓也有本で減る↓平家正節ではこれに相当する「上上上」が無い。

筑波本では、口説における「上中上」という譜記が、原則として●●型アクセントを反映するが、他の曲節では用いられない。これに対して、也有本や平家正節では、折声等の曲節に「上中上」が現れるが、この場合は、次の如く、原則として●●型を表す。

〈例〉

「上中上」——「山は」(也・一・19オ・折声)等。

おそらくは、このような折声等での「上中上」との混同を避けるために、也有本の口説で「上中上」が減少し、平家正節では、それにあたる口説での「上上上」が皆無となったのであろう。

なお、筑波本の「上中上」に対応する箇所は、也有本では「 $\times$ 中上」「中中上」「 $\times$  $\times$ 上」等の形を取る事が多いが、これは一種

の省略表記と考えられる。しかし、この省略表記は、前述の如く、  
 ●●型を反映する折声等の「上中上」との混同を避けようとしたとも考えられるわけだが、またその一面で、新たな問題を生み出すことにもなる。即ち、也有本におけるこの三つの譜記「中上」「中中上」「××上」が、京都アクセントの低起式（一般的な法）・高起式（省略表記）の両用法を持つことになるのである。  
 一般に、也有本の譜記は、平家正節などに比べて、解釈の難しい場合が多いように見えるが、少なくとも当面の例は、次のように解釈できそうである。

〈也有本の「×中上」「中中上」「××上」表記は、やはり低起式を表すのが本来の用法であり、高起式（●●●）を表す例は、いづれも筑波本の「上中上」表記に対応する臨時的な用法であろう。〉

以下に、筑波本の「上中上」と、也有本の譜記との比較例をいくつか挙げておく。

筑「上中上」↓也「×中上」（道を）——禿、「資財」——同  
 筑「上中上」↓也「中中上」（午の）——清水炎上、「心」——  
 妓王、「是を」——同、「顔に」——同 等。

C 低起式（上算式）アクセントの早上がり型と遅上がり型

いわゆる「命」類等の○○●●型が、室町初期頃までに●○○型化したため、いわゆる「兎」類等の○○●●型は、○○●●型との弁別性を失い、おそらくそれが直接の原因となつて、次第に遅上がり型化してきた。この種の遅上がり型化現象は、発音の容易化によるアクセント変化の一環として、古今東西を通じて認められるものだが、南北朝以前の京都語における○○●●型（舟ガ）「兎」

等）や現代南紀勝浦方言における○○●●型（庭ガ）「形」等）のように、○○●●型（古代京都語の「山ガ」「命」や現代勝浦方言の「舟ガ」「兎」等）との弁別性を有する限り、遅上がり型化を起さないという点は注目すべきであろう。京都語文献史の上で、○○●●○○●●型という遅上がり型化表記が著しくなるのは、概ね近世期からだだが、理屈の上では、室町頃にも或程度起こっていた可能性がある。

表一は、低起式アクセント語（二～四音節）の譜記について、前記三譜本を比較したものであるが、この表からも、筑波本↓也有本↓平家正節と、次第に遅上がり型の増えていく様子が見られる。なお、数量的に見た場合、筑波本と也有本との違い（対応総数42例中、遅上がり化したもの5例）は、也有本と平家正節との違い（対応総数29例中、遅上がり化したもの13例）に比べてかなり少なく、興味をひくが、そのことについては後述する。

#### D 四音節人名のアクセント

四音節人名のアクセントは、既に、平家正節における曲節差の問題として或程度取り上げられており、例えば、「●○○○（白声以外）／●○○○（白声）」「●●●●（白声以外）／●●●●（白声）」という対立現象が見られることから、「白声が新しい人名アクセントを示すのであろう」とする説等が提出されている。而して、ここで当面の三本を比較してみても（表二）、やはり筑波本・也有本と平家正節との間に似たような対立現象が見られ、特に「●○○○（筑波本・也有本）／●●●○○○（平家正節）」という対立は、かなり顕著に認められる。そういう意味で、少なくとも人名に関しては、「●○○○↓●●●○○○」「●●●○○○↓●●●○○○」と

というようなアクセント変化が、「語の中央にアクセント核のある安定型」をめざす傾向の一環として、平曲資料当時に起こっていたのであろうと思われる。

これに対し、現代の京都語では、逆に「●●○○↓●○○○」という変化が著しいことから、「●○○○↓●●○○○」の変化傾向を疑問視する立場もあるが、現在京都語は別として、平曲資料当時、あるいはそれ以降における「●○○○（及び●●●○○）↓●●○○」の傾向―即ち、アクセント核を語の中央部におこうとする変化傾向―を否定することはできない。秋永一枝氏の『古今和歌集声点の研究・研究篇上』等では、現京都における●○○○型と●●○○型の揺れが指摘されているし、四音節二類形容詞連用形（詳しく「少なく」「正しく」…）等、平曲当時から現在までの間に「●○○○↓●●○○○」という変化を起こした語類も認められるのである。

ところで、榎垣実氏の『京言葉』10頁等でも説かれているように、現代京都語における四音節人名の多くは●●●●・●●○○○の二形をとる傾向にあるようだが、ここで注目されるのは、この二形がいわゆる基本型（●●●●は第二基本型）アクセントだということである。人名に関する伝統的形式としての規範性の薄さと関係するであろう。すなわち、ここでは、平曲資料当時における「●●●○○（●○○○○）↓●●○○○」という変化をまず想定し、それ以降、現在までの間に別の変化が起こって、●●●●・●○○○○の二形に収斂されたと考えられるわけである。この場合、平曲資料当時の変化が、いわゆる内的変化であったのに対し、それ以降の変化は、なんらかの事情により急速に起こった外的変化で

あったと考えられる。

E 「二拍名詞三類十格助詞「ノ」形」のアクセント

「犬」「山」等、いわゆる二拍名詞三類は、室町初期頃までに、「○○↓●○○」の変化を起こして「右」「川」等の二類名詞と合流した。「ガ・ニ・ヲ」等、多くの助詞が下接した場合も、それに準ずる変化を起こしたわけだが、格助詞「ノ」の付く形のみは、かなり後まで二・三類の区別が保たれていたようである。既に指摘された如く、平曲譜本の場合、二類語＋「ノ」の形は、他の助詞が下接する形と同様の●○○▽型であるが、三類語＋「ノ」の形は、●○○▽あるいは●●▽型になる。この三類語＋「ノ」形のアクセントは、「○○○▽↓●●○○▽↓●●▽」という変化を起こしたと考えられる（第二段階の変化は、連体格文節と下接体言との結合度の強さ故の現象であろう）が、平曲資料では、二類・三類の区別という点で、その伝統的变化形式を保っていたことになる。

今、この問題に関して三本の比較検討を試みると、やはり筑波本・也有本は、平家正節に比べて「三類＋ノ」の形●●○○▽型が目立つようであり、注目される。平家正節にも、●○○▽型表記が無いわけではないが、その例は、表三に挙げたように、「家の子」「物の具」「言の葉」等、格助詞「ノ」に下接する語まで含めて一語化しているものに偏っている。これに対し筑波本や也有本は、そのような特殊形に限らず、「雲の上人」「関の戸」「池の端」等、多くの語に●●○○▽型表記が認められるのである。

F 三拍語の語末下降調（●●○○）回避現象

京都語史における●●○○型の衰退現象自体は既に説かれたところであるが、この現象について三本を比較してみても、やはり筑

波本・也有本から平家正節にかけて、●●○↓●●○○○(または●●●)の変化が起こっている。

以上、譜記形式及びそこに反映したアクセント型という観点から、筑波本↓也有本↓平家正節という変遷の傾向を認めることができた。特に、(c)の現象などにはその傾向が顕著なわけだが、一般的には、筑波本と也有本との差は、也有本と平家正節との差に比べて、やや小さいようである。これについては、次のような事情が考えられる。

まず、也有本の巻頭には、「前田—山下—桐山—谷浦」という伝承系譜が見られるが、このうち、桐山検校(一六八七年権成)は京都から名古屋へ移り住んだ人物である故、也有本の底本は、桐山検校以降、名古屋で伝えられたことになる。而して、也有本の筆者である尾張藩士・横井也有(書写は一七五四年)や、伝承者である名古屋の平曲家谷浦勾当等が、新しい京都アクセントを考慮して譜記を改訂したというようなことは考え難いから、也有本に反映した京都アクセントは、当然、桐山検校あたり、あるいはそれ以前のものと考えられる。これに対して平家正節は、荻野検校の京都在住時代(一八世紀半ば頃。平家正節の成立は一七七六年)のアクセントを反映していると考えられるわけである。

そして筑波本は、也有本よりもやや古い京都アクセントを示していると思われることからして、桐山検校あたり以前、即ち山下検校の頃のものと考えられようか。

また、筑波本では、口説の譜記に関し、詞章の右側に文字式ハカセ、左側に線条式ハカセを併記している箇所がしばしば見られるの

だが、その事もやはり、筑波本が文字式ハカセの創始者、あるいはそれに準ずる人—山下あたりの本であることを示すかと思われる。琵琶法師としての格などを考えても、文字式ハカセの創始者には、前田検校の高弟であり、京都前田流の始祖となった山下検校がふさわしいと思われるのである。山下が京都前田流最初の総検校として前田検校江戸下り後の京都前田流を支え、多くの弟子を育てたこと等は『三代関』を見ても明らかであり、『研究史大成』<sup>(注七)</sup>には、「師前田検校の江戸下り以後、京都にとどまって前田流を支配した重鎮」というような記述もある。

なお、筑波本に関して、山下検校あたりを中心とした京都前田流の譜本という見方をすることについては、先にも少し述べた東北本が、その根拠のひとつになると思われる。今まで述べてきたように、筑波本は、京都前田流の系統と見られる也有本と似ており、それが筑波本を京都前田流とみなすひとつの理由になっているわけだが、Aの「中上」、Bの「上中上」の問題など、筑波本と也有本との間には、ハカセの用い方に差がある。これに対して、東北本は、表五に示すごとく譜記の用い方や実際の用例が、也有本以上に筑波本と似ており(例えば先のABについても、筑波本と一致し、也有本と対立する)、その関係の深さをうかがわせる。

更に、東北本において、わずかに見られる筑波本との相違点は、概ね也有本に似た傾向を示すようであり、京都前田流本の系譜としては、一応、

筑波本↓東北本↓也有本↓愛知県立大学本↓平家正節  
という位置付けができそうである。

ともあれ、この東北本は、譜記(本文と同筆)が筑波本に酷似し

ているため、「巻一にしか譜記がなく、本文と譜記が別筆である」という筑波本の欠点を、質量ともに補う資料として注目されるわけだが、更には、同種の譜本が他にも存在するという意味で、筑波本が、山下検校の如き有力な検校の本とみるにふさわしい譜本であることを裏付ける資料になると考えられる。

以上、前田・波多野両流分岐以前の譜本と言われてきた筑波本を、京都前田流の本、おそらくは前田検校の高弟として京都前田流を伝えた山下検校あたりの本と考え、「筑波本―東北本―也有本―愛知県立大学本―平家正節」というような京都前田流の系譜を想定しつつ、そこに反映したアクセント変化の問題をも考察してきた。いわゆる平曲譜本について、更に言うならば、やはり前田・波多野両流分岐以前の成立かもしれないといわれる、金田一春彦氏所蔵『平家書』（以下『金田一本』）の場合、後で示すように、波多野流古譜本と考えられる『秦音曲鈔』に似た面があり、あるいは波多野流の古譜本かとも思われる。

この場合、譜記等が金田一本に似ているにもかかわらず、表紙に「前田流」と記されている昭和女子大学蔵本（以下『昭和本』）の存在が問題になってくるわけだが、昭和本自体にも波多野流との一致点が多く見られる。また、『秦音曲鈔』に準ずる波多野流古譜本と見られる『平家語本』（山口県立文書館蔵）や『小秘事』（山口県立図書館蔵）等が、『研究史大成』24頁では前田流と明記されている等、波多野流本が前田流とされている例は時に認められるが、逆に、前田流本が波多野流とされている例は聞かない。このような事情を考えあわせ、昭和本が本当に前田流の譜本であるのか、表紙に存する

「前田流」の文字はどういう人により、どういう経緯で書かれたのか、といったような事も、金田一本自体の性格ともども、今後の課題としたところである。

〈金田一春彦氏所蔵『平家書』と波多野流古譜本『秦音曲鈔』との類似点〉

- ① 白声があること。また、白声にはほとんど譜記がないこと。
- ② 波多野流一般や平家正節で、白声から口説へ移るときに現れる「ハツミ」という曲節表示がなく、かわりに、白声の尾部に必ず「マ」という記号があること。
- ③ 口説において、「/＼／＼」というパターンの譜記が、あまりアクセントにかかわりなく、多用されていること。等。

\*表一・表二の調査範囲は巻一であるが、表三・表四は、巻一に限らない。

\*特に注記のないものは、口説における用例である。

表一

三 音 節								二 音 節								筑波本	也有本	平家正節	
御前を	いづくにて	我等も	御前近う	禿と	何地へ	我身浴び	我身喰ひ	御前へ	いづくとも	今日は	父を	尼に	何にかは	何に	人を				僧を
2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2
×	3	2	2	2	2	×	×	×	2	3	2	2	×	2	2	2	2	2	
3	3	3	3	3	③	2	2	2	×	3	3	3	2	×	2	2	2	2	
(91 c)	(383 a)	(826 a)	(1237 a)	(558 b)	(825 a)	(293 d)	(27 d)	(24 c)	(823 d)	(717 c)	(827 c)	(826 a)	(819 a)	(1234 d)	(1237 a)	(715 d)	(828 b)	(818 c)	

四 音 節								三 音 節																	
三千の	今生にて	今生後生	中将とて	今生をも	三年と	何事も	何事か	何事か	実否に	いづれか	中衛を	常盤が	中衛の	我身を	出家人道	我身の	誠や	内裏に	出家の	いづれも	備前の	備前の	二代の	いづくより	
3	3	3	3	3	3	2	2	2	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	2	2	2	2
3	3	3	3	3	3	×	2	2	×	2	4	4	4	3	3	3	3	3	3	3	×	×	×	×	
×	×	×	×	③	③	3	3	③	×	3	×	3	3	×	×	3	3	3	3	3	③	×	3	3	
(827 c)	(819 c)	(815 c)	(719 d)	(825 c)	(806 b)	(557 b)	(817 a)	(813 a)	(94 d)	(823 c)	(470 d)	(474 a)	(470 d)	(823 b)	(556 b)	(823 c)	(812 b)	(1234 c)	(556 c)	(1238 a)	(24 b)	(88 b)	(219 b)	(25 a)	

四 音 節											
親王の	親王の	親王の	同心の	(神武) 天皇	何事を	先例に	国方の	御入内の	御入内の	松殿にて	何事ぞや
3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
3	3	3	3	×	3	3	3	×	×	4	2
×	×	×	×	3	5	5	5	5	5	3	3
(160 d)	(1237 d)	(1237 d)	(719 d)	(219 b)	(809 d)	(294 a)	(294 b)	(221 a)	(221 b)	(380 b)	(816 b)

\*数字は、アクセントが上昇する位置を示す。即ち、

2 || ●●、●●●●、●●●●●●  
 3 || ●●●●、●●●●●●●●  
 4 || ●●●●●●、●●●●●●●●●●  
 5 || ●●●●●●●●、●●●●●●●●●●

となる。なお、×は無譜記等を示す。

\*数字に○がついたものは、それが白声(素声)における用例であることを示す。(それ以外は、口説の用例)

\* ( ) 内は、大学堂書店刊、尾崎家本平家正節影印本の頁数と、頁内での位置を示す。影印本では原本4頁分を1頁としているため、頁内での位置は、a (右上)、b (左上)、c (右下)、d (左下) として表した。

表一

家	武	貞	将	信	義	義	家	信	信	匡	定	成	成	隆	成	成	時	時	実	資	宗
衡	衡	任	門	隆	朝	朝	貞	頼	頼	房	房	親	親	房	範	範	忠	忠	定	盛	盛
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	3	3	3
1	1	1	1	1	×	×	×	×	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	3	3	3
②	②	②	②	②	1	1	1	1	1	1	①	①	1	①	1	1	1	1	②	2	3
(379 a)	(379 a)	(379 a)	(379 a)	(473 d)	(216 c)	(26 a)	(91 d)	(26 a)	(719 d)	(829 a)	(131 b)	(130 d)	(719 a)	(473 d)	(472 b)	(472 a)	(1239 a)	(557 a)	(715 b)	(379 c)	(719 a)
																					筑波本
																					也有本
																					平家正節

義 綱	康 頼	信 西	信 西	資 盛	資 盛	資 盛	宗 任	貞 盛	重 盛	重 盛	重 盛	重 盛	兼 盛	清 盛	清 盛	清 盛	成 景	成 景	秀 郷	為 俊	家 貞	家 房	成 景
2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	×	×	1	1	1
2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	1	1	1	1	×	×	1
② (829 c)	2 (721 b)	2 (292 b)	② (720 c)	2 (383 a)	2 (381 b)	2 (380 c)	② (379 a)	② (379 a)	2 (385 b)	2 (382 a)	2 (125 d)	② (125 d)	2 (160 c)	2 (379 b)	2 (124 d)	2 (556 b)	2 (292 c)	2 (292 b)	② (379 a)	② (1331 d)	② (89 d)	② (89 d)	2 (292 b)

家の子	家の子	物の具(1)	物の具	物の具	物の具	筑波本	也有本	平家正節
×	×	×	×	×	×		●●▽	●●▽
●●▽	●●▽	●●▽	●●▽	●●▽	●●▽		●●▽	●●▽
(1175 b)	(856 a)	(973 b)	(1241 c)	(63 c)	(404 d)			

表三

となる。

3 ●●●、  
1 ●○○○、  
2 ●●○○○  
●●●●●、  
× 無譜記等

\*数字は、アクセント核の位置を示す。即ち、

経	清	清	貞	忠	忠	忠	忠	忠	忠	忠	忠
宗	盛	盛	光	盛	盛	盛	盛	盛	盛	盛	盛
×	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
2	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
② (1331 c)	2 (27 b)	② (25 c)	② (89 d)	2 (24 d)	2 (24 b)	2 (94 b)	2 (91 b)	② (89 d)	2 (88 d)	2 (88 b)	2 (88 b)



將門	中×××	上×××
貞任	中×××	上×××
宗任	上上××	上中××
行はれ	上中上中×	中中上中×
ふるまふ	××中上	×××上
然る	上中上	××上
世末	上上上	中中上
いましめ	上中上中	上上中×
別して	中中上×	×上××
奉らる	×××中上	×××上中
嘉庇	上上中	上×(七5ウ)
次男	上中×	×××
御摂祿	上中上中×	上中××
松殿	××中上	×××中
御出	上中上	×中上(七6ウ)
入道	上上中×	上上上中(七7ウ)
与へ	上中上	××上
えこそ	上上×	×上(七8オ)
候はんずる	××××中上	×××××(七8ウ)
侍	××中上	一一上
こはらか	中×××	上中××
仰せ	中中×	上上中
侍	××中上	×××上
難波	×××	上上×

御定め	×××中上	××××上
いづく	×中上	××中
拜官	中中××	中××(七9ウ)
御定め	×××中上	××××上
御直廬	上上中×	上上××
つくろはせ	上中上中×	上上中××
待賢門	中中上中×	上上上中××
さかざかしき	上中上中×	上上上上中×
しつらひ	上×××	上上××

\* ( ) 内は、也有本の巻数と丁数。

(b) 東北大学本が也有本と一致し、筑波本と異なる場合。(口説)

訴へ	筑波本	也有本・東北本
おさなき	上上×	上上×(七7ウ)
承はって	中上中××	×中上中×(七9ウ)
御加冠	上××	上上×(〃)

その他、口説以外の曲節では、東北大学本が筑波本と也有本の中間的性格を示している箇所も見られる。

《筑波本》今日ヲ 《東北本》今日ヲ 《也有本》けふを  
 中中上 中中上

(卷七・10オ・拾)

／＼  
／＼  
／＼

〔筑波本〕カナグリ 〔東北本〕カナクリ 〔也有本〕かなくり  
（巻七・11オ・上音）等

なお、筑波本と也有本が一致している箇所、東北大学本のみがそれと異なった形をとることはごく稀である。

【注一】

○奥村三雄氏  
「アクセントの変化—アクセント形式と所属語彙の問題」  
〔論集日本語研究(一) 明治書院・昭61〕

○中村萬里氏

「平曲譜本に見える『名』のアクセント—白声・口説を中心に—」  
筑紫国語学談話会発表・昭61等

【注二】

○上野和昭氏  
「平曲譜本にみえる漢字二字四拍の『名』のアクセントについて」  
〔徳島大学総合科学部紀要〕昭63・第一巻）等

【注三】

○秋永一枝氏  
『古今和歌集声点本の研究・研究篇上』（校倉書房・昭55）37頁（初出）  
『古今集声点本における『名』のアクセント』『国文学研究』67・昭54）等

【注四】

○金田一春彦氏  
『日本語音韻の研究』（東京堂出版・昭42）37頁（初出）私のアクセント  
非段階級—和田実氏の論考に答え問う—『国学院大学『国語研究』17・昭

38)

○奥村三雄氏  
『平曲譜本の研究』（桜楓社・昭56）488頁以下等

【注五】

○「アクセントの変化—アクセント形式と所属語彙の問題—」(注一)等

【注六】

「三代関」などによれば、この系譜は、詳しくは次のようである。  
前田九一—山下五一（二六四四）—松岡勾当—桐山ゆん一（二六八  
七）—桐沢妙一（二七二九）—谷浦もう一（二七五九）…  
\*（一）内は検校になった年  
〔参考〕奥村三雄氏

「波多野・前田両流平曲の消長」〔文学研究〕83輯）

【注七】

『増補国語国文学研究史大成9『平家物語』』（三才堂・昭52/初版・昭35）  
39頁

【注八】

例えば、山下宏明氏「平曲研究の基礎的一課題—『平家正節』の墨譜—」  
〔平家正節の研究〕大学堂書店・昭55）には、

○昭和本と下村本・波多野本が「壇浦合戦」の立て方を同じくする。

○昭和本と波多野本が「願立」の間の立て方を同じくする。

○昭和本と波多野本・正節本が「維盛都落」の間と「維盛都落」の立  
て方「小朝拜」「生喰」「宇治川」の立て方を同じくする。（中略）

これらから、（中略）昭和本と波多野本の重なる箇所の見られること（中  
略）が指摘できる。

という記述がある。

【参考文献】

○榎垣実氏

『京言葉』（高桐書院・昭21）等

○渥美かをる氏

『語り物の研究』（『文学』21—2・昭28）

『平家物語の基礎的研究』（三省堂・昭37）

『横井也有自筆『平語』解題』（影印本所収・角川書店・昭52）等

○金田一春彦氏

『平曲の音声』（『音声学会会報』99、同101・昭34）

『国語のアクセントの時代的変遷』（『国語と国文学』37—10・昭35）

『四座構式の研究』（三省堂・昭39）

『国語アクセントの史的研究—原理と方法』（塙書房・昭49）等

○桜井茂治氏

『新義真言宗伝『補忘記』の国語学的研究』（桜楓社・昭52）

『中世京都アクセントの史的研究』（桜楓社・昭59）等

○奥村三雄氏

『波多野流平曲譜本の研究・付奏音曲鈔影印本』（勉誠社・昭61）等

○上野善道氏

『日本本土諸方言アクセントの系譜と分布(2)』（『日本学士院紀要』第四

十一卷第一号・昭62）等